

白井吉見編

戦後十年名作選集

7

永井龍男

白
い

柵さく

原
民喜

夏
の

花

島木健作

黒

猫

壺井
榮

南
天
の
雪

堀田善衛

齒

車

北原武夫

聖
家
族



読者へのお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたの親しいお友だちや、お近くの方々にお伝えください。それと、いっしょに、「読後の感想」を、左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお御職業、年齢などもお書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三

光文社出版局

神吉晴夫

戦後十年名作選集 第七集

昭和30年7月15日 初版発行

¥ 130

編者	白井吉見
発行者	神吉晴夫
印刷者	山元正宜

東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
電話 東京 115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

〔関川製本〕

戦後十年名作選集

第七集

臼井吉見編



編集にあたって

臼井吉見

戦後はやくも十年を過ぎようとしている。これほどの混乱と動揺の一時期が、またとあらうとは思われない。たがい、よくぞここまで生きぬいてきたという感慨を覚えぬものはあるまい。

時代を誠実に生きる人間の、たましいの表現でもある文学にとつても、この十年間は、ただならぬ特別の時期であつたことは言うまでもなからう。きびしい時代に出あつて、一段とあざやかにその本領を発揮した作家もあり、この時期に、はじめて世に出た、特色ある新作家もすくなくない。いろんな個性的な作家が、あれこれと多彩な花を咲かせた大正期にくらべてみても、作風がはるかに複雑で、幅も広く、おもしろくもなっている。これらの作品のなかから、中・短編小説三十九編をえらんで「戦後十年名作選集」七巻を編集したのも、われわれにとつて忘れることのできない、この十年の記念のためである。これはその第七集である。

目次

編集にあたって	三
白　い　柵	永井龍男 五
夏　の　花	原　民喜 二
黒　　猫	島　木健作 四
南　天　の　雪	壺　井　栄 五
齒　　車	堀　田善衛 八
聖　家　族	北　原武夫 一七
解　　説	白　井吉見 三九

白

い

柵

永^{なが}

井^ゐ

龍^{たつ}

男^お

すずかけの木立にかこまれた、同じ日当りよい丘の上でも、病院と院長の住宅は、一二町はなれて建っている。

病院の横手に、ちよつとした畑や花園があり、そのまんなかの道を抜けて、蔓薔薇つるばらのからんだ白い木戸をくぐると、院長の家の庭へ入る。畑は患者たちの手でよく打ちかえされ、麦をまく支度がすっかりできている。花園の端には、一むれの黄菊が地を這うように、咲きのこつていた。

大小二つの洋館を遠巻きにした、丈高いすずかけの木立は、この四五日で枝ばかりになったが、それでもちぢれあがった枯葉は、手袋を干ほしてもしたように、どの木にも少しずつ残っていた。切つても切つても、枝を伸ばす木で、今年も院長の暖炉だんろをにぎわすだけの薪は、もうできている。

現に、鋸のこぎりを引く音の、判で押したようにとだえてはつづくのは、夏のあいだにおろした枝を、短い薪にそろえているのだ。院長の家の物置きもの置きの脇で、髪をさっぱりと丸坊主に刈つた、小柄な若者が、朝から鋸と鉋かたを小気味よく使いつづけ、手ごろな薪の束が、一区切りごとに積みあげられる。

午前の日のさしこむ古風な洋間で、中年の院長は客と話をしている。日曜祭日と、休みつづきを利用して、奥さんと子供が、郷里へたつたのは昨夜のことだ。客の洋服姿にふしぎはないが、院長も服を着ているのは、後で一応、病院へ出かけるつもりなのだろう。

来客も、そんな日にふさわしい、気ごろの知れた友だちらしい。

「ふうん、とうとう買ったね……」

頭を椅子の背にまかせて、くつろいでいた友だちが言った。

別の部屋で、時計が鳴っていた。十五分ごとに、いろいろな音色で時を知らせる、ウエストミンスターという式の時計だ。

「頼んでから二年越しさ。ひよつこり、二三日前に届けてきたよ。わりに、いい音だろう？」

色さまざまな万華鏡をゆくりまわすかのように、静かに変る音色が、しばらく耳をあやす。

「いいね、相当古いんだろうね。」

「うん、あとで見てくれ。」

鳥屋へ追いかまれるらしい鶏が、裏手でけたたましく鳴きたて、二言三言、婆やの聲がしてしんとすると、薪を割っていた若者が、乾いた庭を、手拭いを使いながら、洋間のほうへまわってきた。

若者は、南向きに開いた洋間の扉から、

「お早うございます。」

と、おだやかに声をかけた。そして、主人に向きあつた客の姿をみると、率直に当惑の色を示した。

「お早う。……何か用かい？ かまわないぜ、知ってるだろう、植村君なら。」

「は……」

刈りたての頭に、メリヤスのシャツと、カーキ色のズボンの若者は、いかにも働き者らしい小柄なからだを、もじもじさせてつつ立っている。

「用は、なんだい。」

「は、奥さまが、風呂場の簀の子を……」

「ああ、あれはいいよ。病院の大工に、新しいのを頼んだ。腐ってるんだから、もう手の入れようはないよ。」

「しかし……」

「いいよ、いいよ。おれがそう言うんだから。」

時計が、今度は少し短く、高く低く鳴った。

「どうだい、いい音だろう。こんど買った時計だよ。」

ふしぎそうなようすを示す若者へ、額の禿げあがった院長が笑いかけた。

「はあ、時計ですか。」

若者も、表情をゆるめ、それから客に、あらためて頭をさげた。言葉に、尻上がりの、強い関心なまりがあつた。

「やはり、スイス製だろうね。」

「うん。……なんて言っただけな。聞いたことのある、名前の会社だったよ。」

「自分の村にも、歌をうたう時計を持っている者がありました。」

と、二人ののんびりした会話へ、若者がまじめな顔つきで割つてはいった。

「ネジを巻くと、琴のような歌が……」

「うんうん、オルゴールの、……てえんに代りて、不義を討つ、忠勇無双のわが兵は、つてやつだろう。」

院長は客を見、それから節をつけて、古めかしい歌を、若者にうたつて聞かせた。

客は、多少神経質に、新しい煙草の葉を、その箱の上でたたきながら、

「ふうん、まだあんな目ざまし時計が、残っているもんかね。」

「田舎の人は、物もちがいいから、残っているかもしれないな。」

「時計は、もう動きませんが、背中のネジを巻くと、歌は出てきました。」

「なるほどね。」

院長は子供と話すように、いちいちていねいに、若者にうけ答えた。

「せいせいやかんの、禿げ頭、なんていうのを思ひだすな。」

そんなことを客が言いだしたので、あのころ薬売りの持つて歩いた手風琴は、いまのとどこが

変つていたろうか、というような二人の話になった。

「しかし、楽器なんてものは、本来、そう変るべき性質のものじゃないな。」

「そりゃあ、まあそうだが、それにしても人間というやつは、ふだん、物を見ていないもんだ。手風琴を知らないやつはないだろうが、さてそれなら、絵を描いて見ろとなると、まるでいけないや。」

そんな気ままなやりとりのあいだも、若者は脇を向いて、ぼんやりそこに立っていた。丈夫そうな若者だが、横顔になると、少し頬がこけているかもしれぬ。襟足が、きれいに剃りあげてある。

「まだ、ほかに用があるのかい？」

院長は、いまそれに気がついたように、取りのこされた若者へおだやかに声をかけた。

「は……」

「かまわないから、言ってみたまえ。」

「は。」

若者は足をそろえて、院長を見まもり、あらたまつた調子になった。

「郷里へ、二三日帰つて来たいと思ひますが……」

「ああ、いいよ。」

かたい若者の態度を一瞥すると、院長は椅子の上の上半身を少し折り、煙草を手に取りながら、若者のほうへ、髪のうすい頭を向けた。

「からだの具合も、とてもいいようでありますから。」

「うん。このごろいい調子だよ。行つて来たまえ。」

「は。」

喜色が、若者の全身にあふれた。

「ただね、一言聞いておきたいがね……」

院長は、若者の顔を見上げ、それからしづかに言った。

「君は、君のおかみさんを、しっかりと、信用しているだろうね。」

「……………」

「信用できるかね。」

間^まをおいてしづかに繰りかえされた、院長の何気ない言葉が、眼前の若者にそれほどな打撃を与えようとは、客の思つてもいない光景だった。たちまち若者の顔はくもり、直立したからだがかすかに揺れていた。

「まだ、信用できないんだろう？」

院長はさらに念を押した。一本の草のように、からだを揺らせていた若者が、咽喉もとのあた

りで、かろうじてそれに応じるまでの数秒を、客はむざんなものに見てとった。

「家へ帰れば、おかみさんにも、あわなければならないよ。」

「……………」

「わかったね？ それじゃあ、まだ郷里へは帰れないね？」

若者は、空を見ていた。

一言一言、さとし落す言葉の調子を、そこで院長は、ガラリと変えた。

「どうだい、今年の薪の枯れ具合は……。去年は、燃えが悪くて、ずいぶん苦勞したんだが、けさは、だいぶ霜が降つたらしいね。そうそう、午後から今日は、病院で野球があるんだつたね？ 早く片づけて、行つてやらないと、みんな君を待つてるぜ。……この人は、患者のチームのピッチャーでね、人気者なんだ。」

院長に話しかけられた客は、若者がはずかしげに微笑するのを見た。表情がいつかよみがえつていた。ピョコリと、簡潔に頭をさげ、若者はこともなげに、日向ひなたを去つて行つた。

「この前来たとき、ペンキを塗つていた男だろう？」

「うん。」

「患者とは知らなかった。」

「よく働く男でね。……いつか話さなかったかな。あれだよ、Cの在で、かみさんはじめ実の父

親や兄貴に、重傷を負わした男は……」

「ええ？ あの話かい……」

「働いているときは、われわれとちよつともかわりやあしないんだ。従順で、まめで、気は散らないしね。一年に二三度かな、あんなふうに、ふつと郷里へ帰りたいた言いだすんだよ。すると、かならずさつきの問答さ。僕には決して嘘はつかない。絶対服従だが、……女房にたいする疑惑だけは、どうしても、頭の芯からはなれないんだね。そのくせ、信用しますとごまかして、ここを出て、何か仕でかすというようなくらみは、もう少しもないんだ。」

その男の話ならば、客は思ひだすことができた。

C 県の農家で、妻子のある実兄と、結婚したばかりの自分の妻とのあいだを疑い、その二人をはじめ同居の父母たちに、白昼突如として兇刃をふるった。父は即死、その他は重傷を負ったが、すべては彼の妄想が引きおこした悲惨事であつた。そのとき精神鑑定に立ちあつたのが、この病院の院長で、若者は裁判所からすぐここへ収容された。

去年の、まだ残雪のあるころのことだが、発作が終れば、猫のようにおとなしい若者であつた。院長への信頼と謝恩の意志が、同時に自己の症状をおさめる、いちじるしい効果をあげるこゝろになつて、もう半年も前から、施療患者として病院や院長の家の雑用係を、黙々と勤めている。「そうすると、ああいう問答を、何度も繰り返して来たわけだね。」

「頭の調子の悪いときは、一週間に何度やったかしれないよ。このところ、二三ヵ月なかったんだがね。」

「なおるものなのかい？」

「さあね。……ああいうのは、なかなかむずかしいんだ。」

「おい！ 大丈夫かい。野放しにしておいても。」

「そりや君、そのために僕らがいるんだもの。……このあいだ、おもしろい話をして聞かせたよ。自分は孤児で、子供の孤児院にいたというんだな。」

赤い煉瓦の古ぼけた建物へ、木造家屋を急ごしらえにつけたした孤児院に、八九歳のころの彼が収容されていた。煉瓦建ての部分は、かつて何かの工場であつたらしく、煉瓦を積みあげた四角な高い煙突が、一年中煙も立てずに空にそびえていた。場所は敦賀^{つるが}だというのが、なぜ彼がそう定めているのかわからない。どんなところだったときくと、子供心に、さまざまな汽笛の音を聞いた記憶しかないと答えた。

どういうわけか、その孤児院に、ひどく老いさらばえた爺さんが、子供たちと一しよに収容されていた。足もともあぶなく、一日中どこかの隅に、うずくまっているといった老人である。

「ちようど、こんなに晴れた日で……と、そのときあの男は、秋空を見上げたがね。」

院長は、そんなふうに話しつづけた。

孤児たち全員が、係員に引率されて町へ行商に出た後、その建物に残ったのは、その老人と賄いの婆さん、それに顔中に腫物のひろがった彼だけだった。つらい行商隊からもれるなぞということはめつたになく、ひどく儲けものをしたような気がしたが、深閑とした院の空氣にすぐ退屈して、いたずらをさがしはじめた。

便所から、煉瓦館の裏手の日陰へ出て行くと、上から太い針金が垂れていた。見上げると、それは避雷針につながっているらしく、四角な煙突の頂上近くで、煉瓦のなかへ消えていた。地中へ埋めてあつたものが、いつのまにか引つ張りだされたのであろう。子供に目新しいものだった。ながいことかかつて、彼はその端を、大きな輪に仕上げた。ブランコをするつもりだった。

板ぎれを当て、その上に腰をおろした。調子を見て、よし！ と、本腰にからだをまかせ、煉瓦ぞいに大きくゆするとたんに、グイと針金が伸びた。意外なもろさであつた。やにわに地面へ腰を突き、夢中で頭を被う両手に、針金がしたたか振り落ちて来た。顔にもあたり、息をのむほどの痛さだった。

そのままちぢまるだけ、身をちぢめつくした彼が、やがて立ちあがつた。地面へ腰を突いたとき、何かの響きを聞いたとつさの記憶があつた。それを確かめに、煉瓦館の向こう側へ、彼はまわつて行つた。

まぶしいほどの日当りに、そまつなベンチが、いつものように置いてあつた。すぐその下に、